蛭除け地蔵尊

（『たんなんの民話と伝説』　丹南ライオンズクラブ　より）

今から一六〇年ばかり前のこと。大沢村から当野村へかけて広がる田地は、ほとんどが泥田だったので、ものすごくたくさんの蛭が棲みついていました。蛭というのは、動物や人の血を吸って生きているのです。

春になると、大勢の女の人が田植えに精を出していましたが、蛭のいない村から嫁いで間もないお嫁さんは、田に足を踏み入れるなり「きゃー」と悲鳴をあげ、畦へ跳んで上がる始末です。足にはもう蛭が食いついてるというありさまでした。

足はもとより、田植えする手まで食いつき血を吸うたくさんの蛭に村の人達は困り果て、何か良い方法はないものかと口々に話しをしておりました。

そんな折、大沢村の庄屋の杉本直右衛門さんが、風の便りに船井郡殿田の曹源寺という寺に戒誉和尚という禅僧がおられ、「蛭除けの秘法」を知っておられるということを聞き、早速殿田まで出向いて、戒誉和尚より秘法を教えてもらいました。

村に帰った直右衛門さんは、たくさんの蛭に困っている十ケ村の村の役員一同に会合を持ちかけ、「蛭除の秘法」を伝えました。

「蛭除の秘法」は、先ず石の地蔵菩薩を建立し、この菩薩を蛭除け本尊とし、わざわいの蛭からお守り下さるようにお願いし、おまつりをするというものでした。

これを聞いた村の役員一同は大賛成をし、建立場所を相談した結果、十ケ村の田地が見渡せる矢代村（南矢代）の字「石ケ坪」の山裾の通路の上の三尺五寸四方の場所に決定しました。けれども勝手に建てるわけにはいきません。藩のお許しが要るのです。そこで、十ケ村の役員それぞれが印判して「蛭除け地蔵尊建立願い状」を南組の代官宛に差し出しました。

ほどなく代官様のお許しが出たので、山裾の通路より何段かの石段を造り、蓮華台の上に地蔵菩薩像をまつることになりました。地蔵像にはめずらしい半跏像のお姿のお地蔵様です。

台石正面には「地蔵菩薩」、右側面には「大沢村、同新村、初田村、犬飼村、矢代奥村、同口村」、左側面には「矢代新村、波賀野村、栗栖野村　文政十三年　三月吉日」と刻まれています。

十ケ村の人達の願いを込めたお地蔵様が立派に建てられ、開眼供養には曹源寺の戒誉和尚を招き、村人達も大勢参列して厳かに行われたということです。

お地蔵様をおまつりしてからは、蛭は次々に退散し、今ではこの広い耕地に一匹の蛭も見あたらないということです。

このお地蔵さまは、今は頭部は壊れて無くなっていますが、赤いよだれ掛け、お線香、お花などが供えられ、今もお参りされています。